

巻頭言

新想定回想

高知県黒潮町

町長 大西 勝也

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波による甚大な被害はこれまでの自らの災害に対する認識の甘さを痛感させられるものでした。地震発生から8日目に被災地に入り、目の当たりにした現状は今でも鮮明に思い出されます。そしてその眼下に広がる光景と想像を絶する規模であった地震、津波という物理的現象をどう理解し、今後の黒潮町の防災をどう構築し推進していけばいいのか全くイメージすることができず途方にくれたこともよく覚えています。

その後、翌2012年3月31日に「南海トラフの巨大地震モデル検討会」から公表されたいわゆる新想定において「最大震度7」「最大津波想定高34.4m」という数値が示され黒潮町に衝撃が走りました。

当時を振り返りますと本心からそう思われていたかどうかは別にして避難行動をあきらめるといった意思表示をされる住民が多数発生し、そもそも防災のスタートラインに立てるのかといった状況でした。黒潮町の本格防災はこのようなあきらめと不安、混乱の中でスタートいたしました。

その後、今日まで進めてきた本町の防災の最大の特徴は住民対話であったと思います。役場の全ての職員を防災担当として町内全ての地区に配置する「防災のための職員地域担当制」を推進エンジンとし、避難道をはじめとするインフラ整備や浸水区域を持つ地区の全戸を対象にした「戸別避難カルテ」、各地区の訓練のあり方や地区防災計画策定の取り組み等、新想定公表から6年間の地域でのワークショップを始め各種防災活動は1200回、住民の述べ参加人数は6万人を超えました。地域でのワークショップが2年目を迎えたころにはあきらめの声はほとんど聞かれなくなり少なくとも新想定への衝撃は乗り越え防災のスタートラインには立つ事ができたと実感しました。

黒潮町では毎年「地区防災計画シンポジウム」を開催しています。町内全ての小中学校で行われている防災教育の成果として各学校での取り組み事例を子供たちから、地区防災

計画の取り組み事例を各地区から発表いただくことは参考事例の情報共有にとどまらず、それぞれが自らの防災を見直す契機になるとともにあらためて町全体の防災対策推進の気運を高めることにもつながっています。

昨年の「地区防災計画シンポジウム」で、ある地区から発表された事例をご紹介します。毎年9月の総合防災訓練では町内各地区がそれぞれの地区毎の避難訓練メニューを自ら考え実施します。その地区からは高台への避難訓練を実施し、終了後、参加者が一堂に会した際に「助かった音頭」が踊られたとの発表がありました。地区の女性方が自然発生的に踊られたそうですがその動画の紹介がありました。この取り組み事例を霞ヶ関や永田町で防災を推進されている皆さんや学会の先生方はどう受け止められるでしょうか。単なる住民の悪ふざけと思われるでしょうか。あるいは日本一の津波想定高が示されている黒潮町の防災訓練はもっと緊張感を持って実施されるべきだと考えられるでしょうか。私たちの評価は少し違います。

改めて6年前の新想定公表直後を振り返ってみたいと思います。ある日、突然公表された情報はこれまでも、また現在も存在する自然災害（この場合は地震動と津波）の物理的な事象の規模の可能性が数値的に明確化されたに過ぎませんが大きな混乱を招きました。たとえば健康に不安を抱えて一人でお暮らしの高齢者の方はどう受け止められたでしょうか。あきらめにも似た感情が生まれることはある面では自然なことではなかったかと思えます。0歳児をお預かりしている深刻な浸水想定が示された地区にある保育所の保育士さんたちはその情報の圧力に途方にくれたと思います。また、おそらくあまりにも衝撃的な数値であったためと思われませんが、公表された情報には全く関係がないにも関わらず明日にも来るかもしれないと、ある意味過剰な危機意識も生まれました。今振り返ってみても情報の持つ影響力の大きさを痛感します。当時、町全体を暗いムードが覆い、町全体がこのまま浮き上がれないのではないかと、そんな大きな不安に包まれました。もしかすると一時期故郷への自信と誇りを失いかけたこともあったかもしれません。それでも「あきらめない」を合言葉に官民共同で対話を繰り返しながら各種防災対策を推進してまいりました。その過程で漠然としていた不安が解決には至らないまでも整理されることで、あるいは地域で課題を共有し解決策を模索することでわずかでもそれぞれの不安が解消されてきたように思います。しかしながら官民共同の防災対策が少しずつでも前進していると実感し始めたころにあっても町全体を覆う暗く沈んだムードを完全に払拭できたとは言えず、ある面、悲壮感が漂う中での防災であったと思います。そのような中にあっても「命の教育」を通じ防災に取り組む子供たちの真摯で前向きな姿勢を目の当たりにしたり、まちの防災が各方面から評価されることによって少しずつ自信を取り戻し、町のムードが明るく改善されてきました。「助かった音頭」はその発露、帰着ではないかと思えます。

この間、住民の防災に対する考え方、向き合う姿勢も大きく変化をしてみいました。現在、黒潮町では内閣府からモデル市町村の指定を受け昨年からの運用が始まりました事前情報に対する備えについて町内の2地区をモデル地区としてワークショップを始めました。住民の意見は全て前向きなものであり、事前情報はぜひ提供してほしいといわれます。そして協議をしている間、一貫して明るいムードが漂っています。そこでは行政の責任論などの意見は全く出てきません。これまで自らの力で地域の防災を進めてきた、また、町全体を覆っていた暗く沈んだムードを払拭してきた自信と経験のなせる業であることは間違いないと思います。

先祖伝来、この地に住み続けてきた私たちはこれからもこの町で幸せに暮らし続けなければなりません。これまで推進してきた防災は切り口は防災であったかもしれませんが、そのあり方を教示しているように思います。突然公表された情報にひるみそうになった時期もありましたが「命の教育」を通じた子供たちの成長や自走を始めた地区の姿を見ると日本一の想定は相変わらず難敵ですが少し自信を持っていいように思います。

この間、防災教育をはじめ黒潮町の精神的支柱となり防災のありようについて一緒に悩んでいただいた東京大学の片田先生、地域防災の取り組みを具現化するために今も驚くような頻度で黒潮町にお越しいただいている京都大学の矢守先生をはじめ研究所の皆さん、そして何より想定に真摯に向き合い明るく防災を推進していただいている住民の皆様へ感謝申し上げますとともに引き続きその先になにかがある明るい防災を推進してまいります。